

白河街区跡の発掘調査

調査期間：令和3年10月4日（月）～ 11月16日（火）

調査機関：京都市 文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課

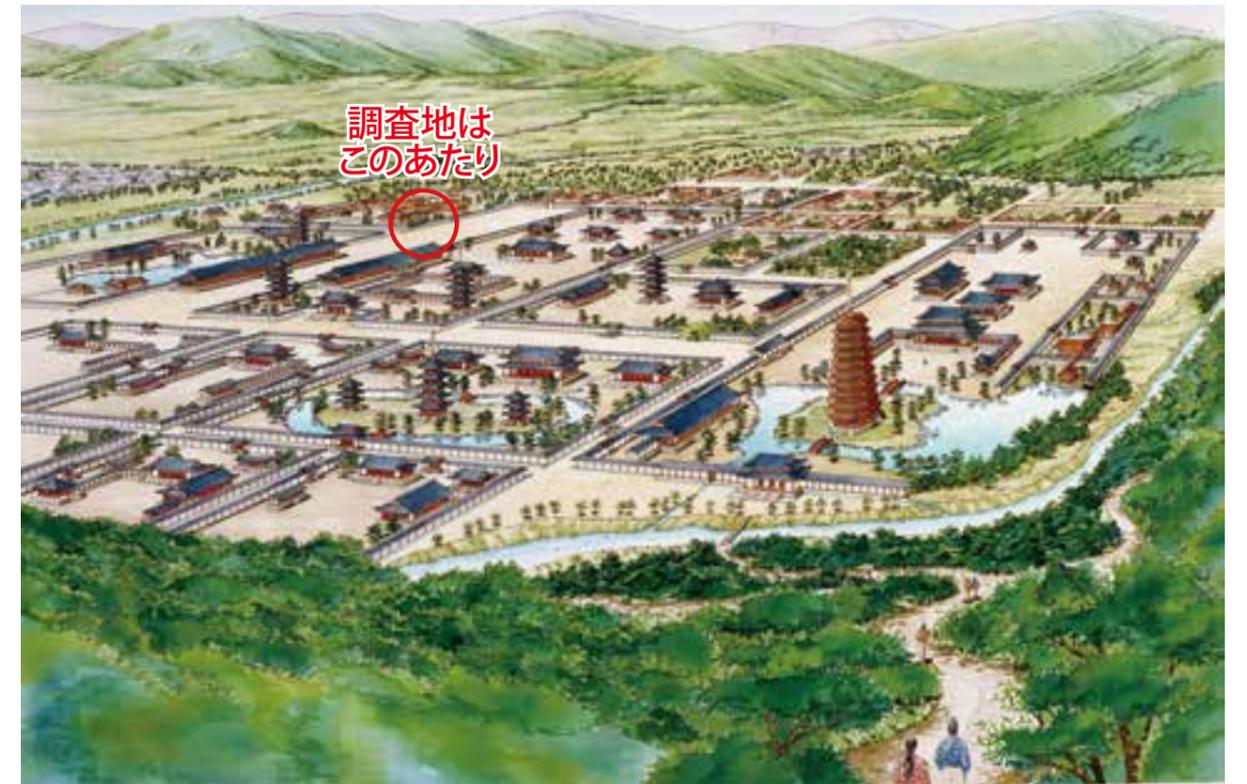


図1 平安時代後期の白河街区イメージ図（作：梶川敏夫に加筆）

1 発掘調査について

白河街区跡は左京区岡崎から聖護院、吉田地域にかけて広がる埋蔵文化財包蔵地（遺跡）です。この遺跡内で個人住宅新築工事が計画され、重要な遺跡が見つかる可能性が高かったことから、発掘調査を実施しました。

発掘調査は令和3年10月4日から11月16日まで、作業日の延べ日数は30日間で、面積は約200㎡を対象に実施しました。

2 白河街区跡について

白河街区跡は平安時代後期から鎌倉時代にかけての寺院・邸宅跡です。平安時代後期、承保2年（1075）、現在の京都市動物園の位置に白河天皇が法勝寺の造営を始めます。以後、岡崎地域に皇族の御願寺が次々に建てられました。名前に「勝」の字が入った寺院が6つ並んだことから、総称して六勝寺といいます。また、隣接する聖護院地域には白河北殿や南殿といった上皇の御所が建てられました。この地区は碁盤の目状に区画されます。この地割があったであろう範囲が「白河街区跡」という遺跡です。

今回調査している場所の近くでも、お堂を建てる前に土を固くする地盤改良のために、にぎりこぶしくらい大きさの石を大量につめこんだ跡やお堂の屋根にのせられていた瓦などが発掘調査で見つかっています。

また、江戸時代の終わり（幕末）になると、この周囲には有力大家の藩邸が林立しました。今回の調査地の西隣で、平成27年に京都大学文化財総合研究センターが実施した発掘調査では、徳島藩蜂須賀家の家紋が入った瓦が出土しており、その存在を裏付けます。絵図から

見ると、その徳島藩邸（阿波ヤシキ）の東隣には広島藩浅野家の藩邸（藝州ヤシキ）が描かれます。あるいは、丸太町通との関係に着目すると、越前松平家の藩邸（越州ヤシキ）が位置した可能性もあります。

以上のように、平安時代後期から鎌倉時代の都市遺跡、幕末の藩邸跡の2つが焦点となる調査でした。

3 今回の発掘調査成果

今回の調査で確認したのは主に江戸時代の大規模な土取りの痕跡です。白河地域では、白色で粒の粗い白川砂をベースに遺跡が成立するところがほとんどですが、今回の調査地では粘土質の土がベースとなっています。壁土や焼き物に使うには粘土質の土が必要ですが、その土が集まっていた当該地ではかなり集中的な土取りがなされたと推測できます。埋め戻した土に入っていた最も新しい時期の遺物は19世紀に下り、藩邸が立ち並ぶ直前の時期です。埋め戻しの土には平安時代後期から鎌倉時代の瓦が多数含まれており、元々は瓦を用いる施設が近辺にあったことが推測できます。そういった施設に伴う遺構は土取り穴で削平されてしまったものの、掘り出された遺物は土取り穴を埋め戻す際に、土とともに使われ、それが今回発掘されました。埋め戻しは地盤が安定するように、畔をつくって、それを境に質の異なる土を盛っていくという工夫が観察できました。大規模な土取り及び埋め戻しには多数の人手が必要であり、そういった動員ができる背景には藩邸の造営があったのかもしれない。幕末に京都に置かれた藩邸からは、動乱の中、各大家が京都をどのように位置づけていたかを読み取れます。考古学的な調査の事例は少なく、今後その実態が明らかになっていくことが期待されます。（新田和央）



図2 調査地位置図



図3 完掘状況（北から）